

CWAJ/VVI Newsletter

2018 年秋号

目次

1. ごあいさつ
2. ECG（英会話の集い）の報告 3月31日（土）“Getting to Know the American South”
3. 2018 年度 CWAJ 奨学生のご紹介
4. 2019 年度 CWAJ 視覚障害学生奨学金のお知らせ
5. ハンズ・オン・アートと第 62 回 CWAJ 現代版画展のご案内
6. シンガー・ソング ライター 栗山龍太（くりやまりょうた）さんへのインタビュー
7. 編集後記

※各項目の最初に★印をつけてありますので、★印で項目検索にご利用ください。

CWAJ = College Women's Association of Japan **VVI** = Volunteers for the Visually Impaired（視覚障がい者との交流の会）**ECG** = English Conversation Gathering（英会話の集い）**SVI**=Scholarship for the Visually Impaired（視覚障害学生奨学金）**JVDCB** = **Japan Vocational Development Center for the Blind**（日本盲人職能開発センター）

1. ごあいさつ

皆様、今年は7月の初めから、活発な梅雨前線による豪雨被災が西日本を中心に報告されました。死者 200 人を超え、多くの不明者や家屋被害など大規模な被害には言葉ありません。一日も早い復興を祈るばかりです。また夏は東日本でも例年になく猛暑でしたが、そろそろ秋風が吹く季節になりましたが、如何お過ごしでしょうか。今回の秋号はお知らせしたいことがたくさんありましたが、ECGの様子や

VVI 奨学生からの原稿と栗山龍太さんへのインタビューを特集として選びました。CWAJ からののお知らせと共に、楽しんで読んでいただければと思います。

2. 春の ECG

2018年最初の ECG は、春の好天に恵まれた 3月31日 午後1時半から3時半、渋谷ダイバーシティセンター、アイリス8階で催されました。午後の開催は、評判が良かったので これからもなるべくそのようにしたいと思います。

ガイドの方を含め VI フレンズ 30名と CWAJ のメンバー 23名が集い、今年の ECG コーディネーターで、講師を務める Ysmania Asci の司会で CWAJ 会長から会の紹介、VI フレンズ、ボランティアそれぞれの自己紹介が ユーモアを交えながら行われました。

その後、東部出身の Ysmania が、11年間住んで深い愛情を感じるようになったアメリカ南部を“Getting to Know the American South”という題で紹介しました。

先ず、南部とはどこを指すのかを手作りの手触りマップで説明しました。それは南北戦争の時の区分によるものですが、文化的に大変ずれており、かなり北の方の州まで入るので調べると驚かれることでしょう。

また、ヨーロッパ人の入植等で多くの人種、種族が共存していた事から、音楽はその影響を受けて ジャズ、カントリー、ロックすべて南部生まれで それぞれの代表的な曲をスマホにマイクを近づけて流し皆で楽しみました。

主産業は農業で 発展の遅れた印象がある南部が、今、ビジネスチャンスに恵まれ、物価の安さ、質の高い生活、温かな気候、人に優しい文化風土などで人気を博し 人口増加率が一番高い地域になっている事を手作りのカードで感じ取りました。政治、経済の面でも大いに力を増しています。

他の地域より宗教的、また、言葉は丁寧ですが、複雑な民族構成から南部特有の表現もあり、録音された南部言葉のサンプルを聞いて分かりにくさも実感しました。

最後に お手製のピーカンパイとコーンブレッドとお茶でもてなし乍ら、各テーブルを回って少しでも VI フレンズとの会話を楽しむ Ysmania は、まさに "Southern Hospitality"を発揮していました。

次回の ECG は、12 月初旬、VI フレンズ参加型のクリスマスに因んだ会を予定していますので ご参加を心よりお待ちしております！

3. 2018 年度 CWAJ 奨学生のご紹介

2018 年度は、海外に留学する 2 名の日本人女子大学院生、日本で学ぶ 3 名の外国人女子大学院生、福島県立医科大学で看護学を学ぶ 2 名の大学生、日本の大学・大学院で学ぶ 2 人の視覚障害を持つ学生の合計 9 名が CWAJ 奨学生に選出され、5 月 9 日の東京アメリカンクラブにて公式に発表されました。まず、CWAJ 視覚障害学生奨学金を授与された 2 名の奨学生を紹介いたします。

網本万里奈（あみもとまりな）さんは、立教大学コミュニティ福祉学部福祉学科で学ぶ 4 年生で、小児癌患者の活動をテーマにした研究をしています。将来は地域で暮らす小児癌のこどもたちを精神面で長期的にサポートしていきたい、と考えています。網本さんが VVI ニュースレターに寄せてくださったコメントを紹介いたします。

○ 2018 年度 CWAJ-SVI 奨学生 網本万里奈（あみもとまりな）

CWAJ 奨学生に選ばれたことを大変光栄に思います。また、素晴らしい授与式と昼食会にお招きいただいたことを心から感謝しています。授与式の後には過去に奨学金を受けられた方の英語でのスピーチがありました。概要は理解できましたが細かい部分を聞き取ることができず、自分の勉強不足を感じました。

私は 1 歳 3 か月の時に網膜芽細胞腫を発症し、3 歳で全盲になりました。また、9 歳で二次がんである骨肉腫によって右下肢も不自由になりました。小児がんによる長い入院生活を繰り返す中で、私は医療以外にこどもの心理的な面でのサポートの必要性やこどもへの告知の問題に気づき、社会福祉の視点からこの課題にアプローチしたいと考えています。

昼食会後の茶話会で、今年の奨学生全員と話す機会を設けていただきました。そこで医療の側面から私と同じように考えている方に出会い、少しお話することができました。その方と意見を交換する中で、他の分野の研究者と手を携え、多面的に研究することでそれぞれが社会に貢献できるのではないかと感じ、このご縁を大切に今後研究に力を入れていこうと思いました。それと同時に英語力をもっと磨きたいと決意を新たにしました。

糸野海生（いとのかいき）さんは、国際基督教大学大学院アーツ・サイエンス研究科で心理・教育学を専攻しています。将来は臨床心理士になり、心理的問題の早期発見・解決に尽力して、辛い思いをしている人を助けたい、と考えています。糸野さんが書いてくださったエッセイ・題名「ひとりぼっちはもうやめた」を紹介いたします。

○ 2018 年度 CWAJ-SVI 奨学生 糸野海生（いとのかいき）

The squeaky wheel gets the grease.（軋む車輪は油を差される）

言わなきゃ誰にも伝わらない。誰かの助けを得るには自己主張が大切という英語のことわざだ。近年、「軋めない車輪」が世界中で問題となっている。悩みや不安を誰にも言えず、苦しんでいる人々が増えているのだ。私は現在、臨床心理学の観点からそのような人々の心について研究している。

ところで、誰かに悩みを相談するには、信頼できる相手との安心感が重要だが、私にも安心して素の自分を出せる場所がある。その一つは、私の敬愛する数学者の S 教授が毎週開催なさるホームパーティだ。この会には学生や教職員、近所のかたがたが集う。そこは何を話しても良い、何も話さず無言でケーキを食べても良い、そんな自由な空間だ。ある日、「信頼される地球市民とは」をテーマに、教授が何気なく「信頼するとは、自分の大切な人の大切なものを、同じように大切にすることだよ」と話された。なんて深い言葉だろう。この空間に溢れている居心地の良さは、私たちの大切なものを愛することに喜びを見出している教授の信頼の証なのだ。私は奥様お手製の Pound cake を噛みしめながら、感動に震えた……美味しい。

私の大切なもの、それは研究と音楽だ。特に音楽は、どんな逆境や苦難の中でも私の心を支える大黒柱である。例えば 14 歳で転校した盲学校。私は常に孤独だった。誰も信頼できず、どこにも居場所がなく、いつも独りでピアノを弾いていた。ところが大学に入学し、私の周りは格段と賑やかになった。今までピアノしかなかった心の小部屋に信頼できる友人が次々と住み始めたからである。しかし今でも、自分の心を表現し他者と交流する窓口として、研究に疲弊した脳の休憩所として、音楽は進化しながら人生を支え続けている。

勿論、友人たちはそんな私の音楽への思いなんて知らないだろう。専門や趣味、相手の大切なものなんて正直よく分からないのが本音である。しかし、信頼とは相手の全てを知ることではない。互いの大切なものを尊重し、愛する姿勢なのである。そして人は相手を信頼することではじめて自分の苦しみを自覚し、自然体の自分として相手に助けを求めることができる。

だから、私は考えている。安心して悩みを打ち明けられる居場所、お互いの大切な

ものを大切にできる社会を作るためにはどうすればいいのか。そして耳を澄ませている。心の車輪が発する小さな SOS を聞き逃さぬように。

しづかにきしれ四輪馬車、
ほのかに海はあかるみて、麦は遠きにながれたり、
しづかにきしれ四輪馬車。
光る魚鳥の天景を、また窓青き建築を、
しづかにきしれ四輪馬車。 （萩原朔太郎 『月に吠える』より「天景」）

CWAJ 海外留学大学院女子部門では、高橋美佐紀（たかはしみさき）さんと田山絵理（たやまえり）さんが選ばれました。高橋さんは環境問題に関心があり、オランダのワーヘニンゲン大学修士課程で森林・自然保全学を専攻し、将来は REDD+（途上国の森林減少・劣化抑制のための温室効果ガス排出削減）の現場に関わりたい、と考えています。田山さんは世界各国の自然災害や紛争地域での人道支援の現場で経験を積むうちに人々の苦しみを緩和すべき支援が更なる被害をもたらす危険性に気が付き、人道支援のあるべき姿を研究するためにコロンビア大学国際政策大学院で国際関係学を専攻しに行きます。

外国人留学生大学院女子部門では、張洋宇（チョウヤンユ）さん、ガニエヴァ・ウミダさん、アザハリ・ジェリリーさんが選ばれました。張さんは中国内モンゴル自治区出身、東京芸術大学大学院国際芸術創造研究科でアートプロデュースを専攻、キュレーターを目指しながら 21 世紀の芸術の在り方について研究しています。ガニエヴァさんはウズベキスタン共和国出身、名古屋大学大学院医学系研究科臨床医学領域博士課程にて子宮内膜症を専門とした不妊治療の研究をしていて、将来は母国で行政の立場から母子保健の向上に貢献したい、と考えています。アザハリさんはマレーシア出身、東京大学大学院医学系研究科生殖・発達・加齢医学産婦人科博士課程にて多嚢胞性卵巣症候群（PCOS）のより良い治療法を研究していて、この病気に苦しむ世界中の女性を助けたい、と考えています。

福島支援部門では、國分和美（こくぶんかずみ）さん、宗方綾夏（むなかたあやか）さんが選ばれました。お二人とも福島県立医科大学看護学部看護学科 3 年在籍で真摯に患者さんに向き合い、寄り添う看護師を目指しています。

4. 2019 年度 CWAJ 視覚障害学生奨学金のお知らせ

CWAJ では 2019 年度も下記のように奨学生を募集します。

- ・視覚障害学生海外留学奨学金 1名 300万円
(過去に CWAJ 視覚障害学生奨学金を受けられた方でも応募できます)
- ・視覚障害学生奨学金 2名 各 150万円

詳細・募集要項などは CWAJ ウェブサイト <http://cwaj.org/jp> に掲載されていますのでご参照ください。

CWAJ 奨学金委員会コーチェアー 渡邊由香 (わたなべゆか)

5. ハンズ・オン・アートのご案内

2018 年の CWA J 現代版画展は、10 月 31 日から 11 月 4 日まで開かれますが、このうち 11 月 2 日、3 日、4 日の 3 日間に、皆様を Hands-on Art にご招待いたします。会場は昨年とおなじです。

会場：代官山ヒルサイド・フォーラム

東京都渋谷区猿樂町 18-8 ヒルサイドテラス F 棟 (03-5489-3705)

集合時間：11 月 2 日(金曜日)①午前 11 時

11 月 3 日(土曜日)①午前 11 時 と ②午後 2 時

11 月 4 日 (日曜日) ①午前 11 時 と ②午後 2 時(見学は 4 時半まで)

集合場所：東急電鉄東横線「代官山」駅 (各駅停車のみ停車) 中央口改札口

申込先：阿部順子 (あべじゅんこ) メールアドレス: j-abe@fuji.email.ne.jp

申込み締め切り：10 月 15 日

今年もたくさんのすばらしい作品が選ばれていますが、この中から 6 つの作品を選んで、立体コピーを制作しています。是非皆さんにご鑑賞いただきたいと思います。会場で皆さんにお会いできますことを楽しみにしています。

Hands-on Art. Coordinators

クリスティーナ齋藤 & 石井ふみ子

6. 栗山龍太(くりやまりょうた)さんへのインタビュー

皆様の中には CWAJ のチャリティー・コンサートや VVI のアニュアル・パーティーで演奏をされてきたシンガー・ソングライターの栗山龍太さんをご存知のかたも多いと思います。栗山さんは現在、横浜市立盲特別支援学校職員として、鍼灸手技療法をは

じめ医療系全般の指導に当たっておられますが、好きな作詞・作曲を活かして今まで、各種ライブイベントやFMラジオなどに出演し精力的に発表の場を設けて活動されてきました。今回はパラリンピックの応援ソングをCDリリースされたいきさつやご自分で使用している特殊ギターのお話を、今回編集担当を引き受けた古田映子（ふるとえいこ）が去る5月23日に栗山龍太さんの学校に伺い、インタビューしてきましたのでご紹介記事にしました。

古田：パラリンピックの歌を作曲・作詞したいと思った心境を教えてください。

栗山：オリンピック・パラリンピックに出場するアスリートたちは、果てしない毎日のつらい練習、挫折や失望感を乗り越え、私たちに、多くの勇気・希望・感動を与えてくれます。視覚障がいのある僕が、こんなに頑張っているパラアスリートたちに、何ができるのかと考えたとき、そんな彼らをなんとか応援したいという気持ちをリアルビクトリーという歌に込めたいと思いました。

古田：曲のタイトル"リアルビクトリー"（本当の勝利）にこめた想いは、どんなことなのでしょう？

栗山：国籍・人種・障がいの有無にかかわらず、最善を尽くして戦いぬいた人たちが、勝負の勝ち負けを超えたその先に出会う、「共に認め合える」という心ですね。その尊い心こそが、これからの時代を動かすパワーの源であり、リアルビクトリーではないかということなのです。

皆様、インタビューの途中ですが、今話題にしているリアルビクトリーの歌の視聴がこちらから出来ます。https://www.youtube.com/watch?v=_ua0qCiEioM
今お聞きいただいたリアルビクトリーがパラリンピックのテーマソングに選ばれるように、栗山さんは広報活動をされています。

その様子などを、インタビューの続きでお届けいたします。

古田：現在のCDやYouTubeでの反響は如何ですか？

栗山：CDも好評ですが、YouTubeでも聞けます。1か月ちょっとで再生回数が1500回ほどになっています。お蔭様で好評であり、ラジオでは5~6社から要請がありますし、テレビからも声がかかっており、結構いい形で伸びていると思います。YouTubeもよく聞かれていて嬉しいです。YouTubeは動画にもなっているので、印象も強いのだと思います。また友人のイラストレーターに依頼して作成した、ジャケットやちらしも明るい感じのものとなり、これも多くの人に知ってもらうために効果的な役割を果たしています。最初CDのジャケットを写真にするのはどうかと本当に迷ったのですが、オリンピックとパラリンピックの差別化も図りたかったという意図もあり、義足や車いすなどを写真で映してもリアルすぎて表現としてちょっと直接的かとも思い、妻の発案でエイイチさんというイラストレ

ーターにお願いすることにしました。

古田：リアルビクトリーの曲の発想と作成方法はどのようなものでしょうか？

栗山：曲とメロディーは同時に作ります。今回の制作は2年ぶりだったこと、同じ障がい当事者として伝えたいことが多すぎて2曲分以上もありそうだったので、歌詞は何回か書き直しました。パラアスリートには障害者の代表として使命感を持って頑張ってもらいたい、ひいてはそのことが未来の障害者の希望となり、健常者の励みにも繋がるという意味で焦点をしっかりと搾りたかったので、本来の歌詞をいろいろな人に見てもらい、知恵を借りて、ぐっと短くシンプルにしました。編曲のためのアレンジャーさん、ジャケットのためのイラストレーターさんなど、今回のCDは多くの友人の汗の結晶です。

古田：最初にオリジナル曲を作る際はピアノの鍵盤に触れてやるのですか？

栗山：メロディーはピアノとは限らずにギターでも鼻歌でも自然に作り出します。最初は、サビの部分のメロディーを作って、そのメロディーにキャッチーなフレーズを入れていきました。それから、「リアルビクトリー」という言葉は何回も聴いてほしいので、俳句の5-7-5に当てはめるように歌詞をからめながら、「リアルビクトリー」に添えていきます。

古田：具体的に作曲過程で苦労したところはどこでしたか？

栗山：コンテストや合唱曲などに使用する場合は5分を切るようにした方がいいというアドバイスをいただいていたので、5分を切るようにテンポを上げて、時間を意識しました。

古田：具体的に歌詞の作成で苦労したところは？

栗山：当初はパラリンピアンのあるところを、同じ障害者として後押ししたかったので、伝えたいことをたくさん詰め込みすぎて、それが実は応援歌なのに自分目線のことだったりして、同じ障害者であるパラアスリートを叱咤激励するあまり、ちょっと偏ったものになってしまっていました。はじめは2曲分くらいのメッセージ量があると皆に言われて、それから、そぎ落とす作業が大変でした。俳句の5-7-5の感覚で言葉を極力省きました。誰しものが共感できるようなテーマにして、短くする作業に没頭しました。また、応援するという1点に絞り直して、焦点がぼやけないように、何回も推敲をし直しました。パラリンピックの歌でありながら、最終的にはみんなに共通する普遍性を入れた応援歌にするところに苦労しました。

皆様、インタビューの途中ですが、ここで歌詞をお届けします。

1

飛び散る汗を 太陽が焦がすほど走った人
凍てつく大地で 悔し涙が 凍りそうになった人も

いくつものドラマを 背負い
この場所に 君は 立っている
今、エールを 勇気に替えて あの空に 羽ばたいて行け
さあ 燃やせ 君のハート そうさ それが リアルビクトリー
その情熱で みんなの肩を 押してゆくんだ
さあ 燃やせ 僕のハート そうさ それが リアルビクトリー
君はあきらめない 本当の勝利を つかむまでは

2

失った光の向こうに 夢を描いた人
なくした足の自由を超えて 新たな夢を 手に入れた人も
それぞれのゴールを 目指し それぞれの壁を 越えてゆく
輝く君の その姿が みんなの心を 照らしてゆくから
支える家族 仲間たちがいる 迷わず君は信じた道を進め
どんな山もどこから登っても たどり着ける頂上は同じだから

さあ燃やせ 君のハート そうさ それが リアルビクトリー
倒れても 起き上げる 熱い思い 胸に抱いて
さあ燃やせ 僕のハート そうさ それが リアルビクトリー
君は あきらめない 本当の勝利を つかめるから
共に 認め合えた時 それが僕らの リアルビクトリー

皆様、素晴らしい歌が頭に入ったことでしょうか。それでは、またインタビューを続けましょう。

古田：歌詞が構造的で立体感があるように思いましたが、工夫されたのは具体的にどの辺でしょうか？

栗山：歌の構造で説明しますと、一番がどちらかと言うと、オリンピック選手をイメージしているのに対し、2番がパラリンピック選手のイメージ、エンディングは共通に言えること、盛り上がるパッションを盛り込みました。

一番の歌詞の中で言うと、「暑い太陽の下で走って身体を鍛えた選手がいたり寒いところで、悔し涙を流しながら練習したという選手がいたりという、出身地や練習環境の違いを入れました。2番では視覚障害の人がいたり、義足の選手がいたりという点、さらには1番と2番がそれぞれオリンピックとパラリンピックといった形でパラレルになっています。曲作りのテーマにパラレルがあり、その選手たちに掛けられたエールを勇気に代えて羽ばたいてほしい、それが「僕のハート」というサビの部分に辿り着く、ということで、立体感も出せました。「支える仲間や家族がいる」

というくだりは展開の部分にあたりますが、それを仕掛けに盛り上がる工夫にしました。お膳立てをどうするかが問題でしたが、「リアルビクトリー」にどのように美味しく持っていくかという過程が苦戦しましたがやりがいがありました。

2番の「失った光の向こうに」というのは見えない人のことを言っているのですが、2行目は義足の人の話になっています。音楽なので、表現として夢のある話を歌いたい、音楽の力を借りて応援歌なので、マイナスなことは歌いたくないと強く思っていました。

「亡くした足の自由を超えて」という歌詞は、実は不自由なわけですが、ここで「不自由」という言葉は絶対に使いたくなかったので、反対の言葉の「自由」にしました。歌詞はあまり簡単にしてもつまらないし、リスナーに「あれっ」と考えてもらいつつみんなのこころを前向きに自然と癒していくというシチュエーションを採用しました。

古田：頭の中では歌詞は文字なのですか？

栗山：音や響きを意識して点字で作り、後で適切な感じに変えます。メロディーが5-7-5になって、その枠の中に言葉を入れるような感じです。

古田：楽譜は点字ですか？

栗山：楽譜は作曲の時には使いません。ただ、最後の「共に認め合えた時それが僕らのリアルビクトリー」という人権意識的な意味合いも含んでおり、中高生にもこの曲を歌ってもらい、パラスポーツに興味を持ってほしいという狙いもあったので、最終的には合唱譜面に起こしました。

古田：楽譜にするのはどうするのですか？

栗山：今回は専門の業者に頼んで3部合唱の譜面にしてもらいました。Jポップの世界では楽譜がどの程度重要視されるのか判りませんが、僕のスタイルは音源を作り、パソコン上で多重に音を重ねていわゆる打ち込みでカラオケを作成します。そして歌やコーラスを入れ、誰もがちょうど聞きやすいようにリバー部などのエコーを入れて音のバランスや調整を図ります。

今回は譜面を使わず、僕が簡単な音源を作ったものとICレコーダーで録音したサンプルをアレンジャーに依頼するという形で進めました。

古田：日頃、特注の8弦ギターでひいていると知ったのですが、一人でリードもベースもこなす、一人で二人分やるといことになりますか？

栗山：はい、今回の「リアルビクトリー」では使っていませんが趣味で色々なギターを制作しています。ファンフレットといって13フレットを中心に斜めに扇状（おおぎじょう）にフレットを打ち、低音部分の弦長を稼いでいるという仕組みです。そして一つのギターからギターアンプ、ベースアンプに2本のケーブルが出ているというものです。写真で見せれば一目瞭然なのですが、歌いながらベースとギター

を弾くという大道芸的なものであるにも関わらず、見た目が普通のギターなのであまりこのすごさが判ってもらえないところが玉にきずなのですが。

北鎌倉に住むアメリカ人の友人がいて、その同級生がチャーリーハンターという8弦ギターを使っているアーティストなのです。彼のライブに連れて行ってもらった時、僕は見えないのでその演奏はギターとベースとドラムの3人でやっている普通のロックかと思っていました。しかし後で聞いてびっくり、ドラムと二人でやっているというのです。そのことに衝撃を受けて、僕は普段からギターで伴奏を付けてメロディーを一人で弾くのが得意だということもあったので、北鎌倉の友人にチャーリーハンターと同じものを調べてもらいアメリカの工場でカスタムオーダーしてもらいました。そしてチャーリーは歌いませんから僕はその楽器をもって歌うことによって3パート分をこなし、ドラムと二人でバンドをしようと考えました。全くマニアックな話で判ってもらえる人がどれくらいいるか判りませんがね。

古田：そのマニアックな設計は栗山さんがやるのですか？

栗山：はい。8弦ギターはチャーリーハンターの考えたものなのですが、7弦ギターのチューニングや設計などはそうです。音楽と数学は近いと思います。

岐阜県の工場で作った7弦ギターのチューニングなどは、数学的に考えると本当に面白いです。ふつうは6弦のところを1本増やして7弦にするわけですが、弦の太さなどを変えて、2弦から7弦の6本で通常の1から6弦を弾くのと同じ形で低音移調して同じようなことが弾けるわけです。そして残りの1弦でテンションなどを入れて、よりコードやスケールの自由度や表現力を増すことができるということなんです。これも視覚障害を補うという意味でローポジションからハイポジションに移る時のミスを少しでも軽減できるという意味もあり、手元で低い音から高い音まで移動を減らして演奏できるというメリットもあるのです。

ギターは独学ですがその分、自分流が試せるわけであり、そんなことも実践できるのだと思います。障害は個性だという論議もありますが、このような楽器を使ってより表現力の幅が広がりそのことが自分ならではのスタイルの追求になるのであればそれは本当のオンリーワンへの挑戦だと思います。

皆様、嬉しいお知らせがあります。このインタビューをしたころには、リアルビクトリーがまだパラリンピック応援ソングには選ばれていませんでしたが、なんと!!!7月14日に、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会参画プログラム認証プロジェクトに合唱曲として採用されました。皆様でお祝いしたいと思います。リアルビクトリーを毎日耳にする日も近いことでしょう。

7. 編集後記：

CWAJ では 10 月に企画されている CWAJ 現代版画展に向けて、メンバー一同多忙な日々を送っております。一人一人のメンバーは仕事を持っていたり、親の介護があったり、子育てがあったりと忙しい日々を過ごしておりますが、今日の前にあることで、限られた時間で、私たちにはどんなボランティアが出来るかを考えて、こころを一つにして頑張っております。誰もがリーダーシップを持って社会にどう貢献することが求められる時代になってきていると思います。リーダーシップは人、それぞれの中に内在するものです。私たちはボランティアをこれからも続けますが、皆様も私たちのボランティアを応援してくださいね。前回までは編集担当が渡邊由香（わたなべゆか）でしたが、渡邊は奨学金委員会コーチア－を引き受け忙しくなったために、編集担当は古田映子（ふるたえいこ）に交代しました。至らないことも多いと思いますが、よろしく願いいたします。

CWAJ/VVI ニュースレターは、CWAJ ホームページでもお読みいただけます。

<http://www.cwaj.org/Education/vvi-j.html>

皆さまのご感想を、ぜひ下記の連絡先までお寄せください。

連絡先が変わった方も、下記までご一報ください。

(連絡先) VolunteersVI@cwaj.org

編集担当：古田映子（ふるたえいこ）

発送担当：本村理子（もとむらみちこ）